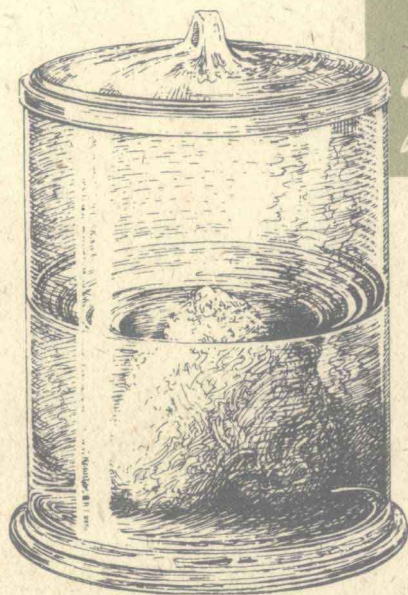


加賀乙彦
短篇小説
全集 2



最後の旅

最後の旅



乙彦
小説

全集
2

潮出版社

最後の旅

加賀乙彦短篇小説全集2

一九八四年三月二十五日 印刷
一九八四年四月 十日 発行

定価 一四〇〇円

著者 加賀 乙彦

発行者 富岡 勇吉

発行所 株式会社 潮出版社

郵便番号 一〇〇二

東京都千代田区飯田橋三ノ一ノ三

電話 販売部 (03) 二三一〇セ四一

編集部 (03) 二三一〇セ八一

振替 東京五一六一〇九〇

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えます。

目次

車の精——7

風と死者——55

最後の旅——107

春の町にて——171

夢見草——193

遭難——213

*

『荒地を旅する者たち』の頃——242

*

解説 金子昌夫——248

裝丁
菊地信義
裝圖
柄沢
齊

最後の旅

加賀乙彦短篇小説全集Ⅱ

車 の 精

わたしの名前はピッピヌという。なぜピッピヌなのか与り知らぬことだし、第一名付け親である主人にも分らぬらしい。しかし主人は、Tという名ある医科大学の助教授で、もつともらしい理屈をこねるのが好きだから、フランス語のオシッコを意味する *pipi* から由来していると言ったり、カロリング王朝のフランク王 *Pippin* にあやかっただと説明したりする。しかし、或る時、Aという男からそれは *pippin* という林檎の一種のことでしょうといわれてから「そういえばお前の肌の色は林檎にそっくりだからな」と言ったりする。また主人は「お前は、常の車じやあない。お前はこの世にたった一台の独創的な車なのだ」と言う。言うといっても車のわたしに向って言うのだから、つまり独り言である。わが主人にこの独り言という一方交通の告白癖あるが故に、わたしは彼の内面生活を垣間見ることができたのであるが、その具体例については追追に紹介することしよう。

《この世にたった一台の独創的な車》というのは、主人の気持としては真実でも、もちろん客観的真理ではない。わたしを作ったマンチェスターの或る自動車会社において、わたしと同型の車は何十万となく製作されたわけだし、それはイギリス、オーストラリア、インドなど左側通行の国々で主に使用されている。当然、この日本にも少しは輸出されているのだが、わたしの主人はまだわたしと同型の車にこの国で出喰わしたことはないらしい。わたしがたった一台の独創的な車ということも主人からしてみれば決して誇張した表現ではないのである。

この国の乗用車の通念的な形からみると、たしかにわたしの風貌は奇態だといえる。それはすらりとした流線型とは程遠く、どことなく不恰好で非文明的なのだ。楕円形の円盤を二つ重ねたような車体は変に腰高で、機械というよりも押潰された達磨に似ている。この点は主人も十分に認識しているらしく、バックミラーに釣り下げるマスコットはいつも張子の達磨なのである。ついでに言うと、主人の勤先の大学病院の医局員たちは、《スケートをする貴婦人》だの《墜落した旧式の空飛ぶ円盤》などにわたしをなぞらえている。

わたしがはじめて主人に会ったとき、より精密に言えば、わたしの今の主人が、わたしの前の主人であるフランス人の老神父のところに、わたしを見に来たとき、主人の顔に現われた失望の色をわたしは忘れられぬ。

「これですか」と彼は言った。

神父は、これはちよつと迂闊な人で、フランス人らしく日本人の表情を読むのが下手で、尼さんの愛想笑を不謹慎な嘲笑と勘違いしたりする人だが、このときはさすがに相手の気持を汲んで

宣伝を始めた。

「いや、これでエンジンは中々強力なものでございますよ。どんな山道だって、それ、オーヴァーヒートなんかしないで登れますし、ブレーキだって強力でよく止りますでございますよ。パンクもしませんでし、タイヤだってまだ新しくって、強力でございますよ」

「なるほど」と一渡りの弁論をきいたあとで主人は微笑し頷いた。神父の舌足らずの発音や、明らかに尼さんから感染したらしい妙な言廻しに面喰いながらも、少くともこの神父さんが嘘を言わぬ善良な人間だとは思ったらしい。

扉をあけて座席の下を覗きこんだり、ブレーキ部分の金具の摩滅状況を点検しながら、フウムとかフンフンとか間投詞を蒔き散らすその様子は、いかにもひとかどの車通とみえた。が、これは実のところ単なる見せ掛けであって、彼はこと車に関して運転免許に必要な程度の表面的な知識しか持たせてはいなかったのである。もっとも、彼の知識は、外国人免許、つまり構造試験なしの運転免許を持っていた神父よりはるかに豊富であって、この点、語学力に加えて神父よりは優位に立っていた。

たとえば、「クラッチ板の抵抗はどうですか」とか「バッテリー水の濃度は現在何度でしょう」という質問をされると神父は途方に暮れた表情で肩をすくめる。そこへ彼は「ロウギアに入れるのにはダブル・クラッチングが必要でしょうか」と追い討ちをかける。いかにも銜学的なやり方である。

彼は、浅黒い、日本人としては目鼻立の秀でた精悍な顔で神父を睨めつけた。

「とにかく乗せていただきます」と顔をしかめながら彼は言った。そして、神父を助手席に乗せ、自分でハンドルをとった。

彼の運転技術は、思いのほか堂に入ったもので、このところ神父の拙劣な運転に老人じみた動きしかしていなかったわたしは何だか若返ったように走りだした。彼は急に速度をあげてみたり、わざと鋭角的に曲ってみたり、坂道の途中で停車と発進を繰返したり、したい放題にわたしを操った。その界限というのは家の立込んだ起伏の多い丘陵地帯で道に変化が多く、運転技術を試すにはすこぶる恰好の場所なのである。散々乗り廻したあげく彼は神父に言った。

「おおせのとおり、エンジンは強力ですがブレーキはあまいですね。しかし、見掛けによらずいい車ですね」

「ありがとうございます」

「ところで値段ですが、年式が古いし距離もいってるから、十二万円は高すぎます。失礼ですが、これだけ古いと普通はポンコツ屋行きですね。はつきり言って一万円ぐらいにしか売れませんよ」

「ですが、あなた」神父はあわてて弁解しはじめた。商取引に特有な虚実半々のやりとりがあったすえ、案外簡単に値段の折合いがついたが、それというのも、彼のほうははじめから十二万円とは安い車だと考えていたし、神父のほうは、帰国する日が迫って売り急いでいたからで、とにかく十万円で双方が納得したのである。しかし、本当をいうと神父は、わたしの前の主人であるガストン・メーグルから五万円でわたしを買取ったのである。このガストン・メーグルはフラン

ス人の青年実業家で新車のわたしを買い、日本国中を乗り廻し、大いに金を儲けたのだが、すこぶる粗暴で無鉄砲な運転ぶりで、曲りくねった山道を高速でつっ走ったり、悪天候の難路を強行突破してみたりしたあげく、二十メートルもある崖から墜落してしまったのである。さいわい落ちたところが沼地で、いわば液体の緩衝作用でガストン・メーグルと連れの女はかすり傷程度ですんだが、わたしはといえば、車台に歪みを生じ車軸が振れ曲るほどの重傷を負った。すでに満身創痍という状態に加えて、この重傷では、その時もはやわたしの命脈はつきていたのだ。しかし、ガストン・メーグルは少しも怯まず、行き付けの修理屋に命じてわたしの車台と車軸を金槌で叩き直し、傷だらけの肌には鍍金塗装をほどこし、およそかかる表面的な修復について異常な練達を誇る日本人技術者の特性を最大限に利用し、見た目には新車とまがうばかりに仕立上げさせた。そしてガストン・メーグルは神父に言ったのである。「本来ならば教会に寄付するところなのですが、百万円を超える物品をただで差上げたとあっては、わたくしのみ神に近いようで不公平ですから、五万円、ほんのおしるしにいただければ結構です」と。

この件については神父には主観的な罪はない。彼は立派な高級車とびきりの安値で買ったと思ったのであり、わたしを価値の二倍値で誰かに売ったとしても、なお心からの善根をほどこしたと考えていたのである。

ところで商談は成立し、わたしの三人目の主人が確定したわけだが、何しろそこにいたる間に十数回ほど丘を巡りに巡ったのです、すっかり日が暮れてしまった。たかが十万円ほどの買物にかかる綿密慎重な調べ方をしないと気がすまないと気が、主人の性格特徴なのである。さて、

神父に別れを告げた主人は、前照灯のスイッチをいれた。が、どうしてもつかない。

「変ですね」彼は猜疑の目を神父に向け、後へまわってみた。「尾灯もつきませんね」

「おかしいでございますね」神父は首を傾げた。もっともらしくスイッチを点滅させたり、配線部分を眺めたりしたが無論何事がわかるわけではない。この老神父は雨の日と夜は運転しなかったので、照明装置のことは全く気にかけていなかった。

「変ですね。バッテリーはあがっていないし、ヒューズは切れてないし、電球が四つとも切れるつても考えにくいし」主人は溜息をついた。薄闇の中を明りもなしに行くわけにはいかず、買ったばかりの車に修理屋を呼ぶというのも業腹である。

と、両の前腕をつつましやかに十字に組んでいた神父が、何を思ったのか平手で思い切り右の泥除けをたたいた。するとどうだろう、その前照灯が点いたのである。片目の開いたわたしを神父は嬉しそうに眺めた。

「ねえあなた、こうすればよろしいんですよ」

神父はこんどは左側の泥除けをたたいた。そうするとわたしの両眼が開いた。以下尾灯も順次に同じ手順で簡単だったのである。

「どうぞごさいましょう」勝ち誇った神父は両腕を八の字型にして胸を張った。

「そうですね」主人は疑わしげにスイッチを点滅させ、もう一度泥除けをたたいてみたりしたが、一度点いた灯は消えはしなかった。